

復活節第四主日

2016.4.17

ヨハネ 10・27-30

毎年、今日の復活節の第四主日のミサではヨハネ福音書の 10 章に記されている、イエスが語られた、羊飼いとその羊たちのたとえの箇所が朗読されるように定められています。聖書を手にとって、今日の福音の前後を読み直してみると、ヨハネ福音書の 10 章の一連のおことばは、イエスがまだ十字架につけられる前に、イエスを認めようとしないユダヤの人々に語られたおことばであることが分かります。けれども、ヨハネ福音書を最後まで読み通すと、あの時、誰も理解できず、受け入れようとはしなかったイエスのこれらのおことばは、イエスの十字架の死と復活の意味を解き明かすおことばであったことが分かるはずで、イエスがご自分の死をどのようなものとして受け止めておられたかが、ここに語られています。今日の福音の箇所に先立つ 10 章 11 節では「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」と語られており、さらにその直前には、「わたしが来たのは、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるためである」と語られています。イエスはご自分の死を羊飼いが羊たちのためにそのいのちを投げ出すことと受け止めておられたのです。それが父なる神からご自分に託された使命であると受け止めておられたのです。

ヨハネ福音書 10 章のイエスのおことばは、ルカ福音書 15 章に語られている、迷い出た一匹の羊を、全てを置いて探し歩く羊飼いの話を思い出させるかもしれません。そこにおいても、その迷える羊を見つけ出した羊飼いの喜びは天に通じる喜びであるとイエスは語られたのでした。父なる神にとって、全ての人は、羊飼いにあってその羊たちがそうであるように、決して失われてはならない、かけがえのない者たちです。イエスはこの神の想いをわたしたちの世界に告げるために、その神の想いを身をもって示すために、父なる神から遣わされたよい羊飼いだと言われているのです。そのような者として、御自分がメシアである言われているのです。

イエス・キリストの十字架の死と復活の過ぎ越しを記念し祝った復活祭に続くこの時期、わたしたちは、イエス・キリストの十字架の死と復活がわたしたちにとってどのような意味を持つ出来事であるのかということを読み巡らすよう、復活節の教会の典礼によって招かれています。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」という今日の福音の最初のおことばは、あの時、イエスが何を言っておられるのか理解出来なかったユダヤの人々にではなく、イエスの十字架の死をイエスが言われたように理解し、信じた者

たちのために語られているのです。イエスのあの十字架の死は、自分たちのためにイエスはそのいのちを与え尽くしてくださるためのものであったと受け止めることができた者たちにとってのみ、イエスのあの十字架の死は、今日の福音のおことばどおりに、羊のためにいのちを捨てる羊飼いの死であることが理解できるのです。そのような人々にとって、「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」とのおことばは、十字架の上から呼びかけておられるイエスのお声として聞こえてくるはずです。十字架の上から招くイエスのお声をそのように受け止めることが出来た人々は、自分たちが良い羊飼いとしてそのいのちを与えてくださるイエスの声に従う羊たちであると受け止めることが出来るはずです。

わたしたちはイエスの十字架の死と復活に与る洗礼を受けることによって、イエス・キリストを信じる者たちとされ、イエスとのこのような関係に招き入れていただいたのです。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」という福音のおことばを、あの十字架の上から、ここに集うわたしたち一人ひとりに呼びかけておられるイエスのおことばとして聞く者とされたのです。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」との今日の福音のおことばを、今日もこのミサに集うわたしたちをここに呼び集めてくださった、わたしたちを導くお方の声として聴く者たちとされているのです。

十字架の上から呼びかける良い羊飼いとしてのイエスのお声を聴き分けることが出来た羊たちにイエスは何を与え、その羊たちをどこに導いてくださるのでしょうか。「わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う」。羊飼いがその羊の一匹一匹を知っているように、わたしたちが信じるイエス・キリストは、わたしたちがどこに向かおうとも、わたしたちを知っていてくださるのです。わたしたちがその後に着いて行くことができるように、わたしたちを導いてくださるのです。そのイエスはわたしたちをどこに導いてくださるのでしょうか。「わたしは彼らに永遠のいのちを与える」。今や復活の栄光のいのち中におられるイエス・キリストは彼に従う者たちを神のみもとに生きる永遠の絶えざる復活のいのちに導いてくださるのです。これら全てはわたしたちが洗礼を受けることによって受け入れたわたしたちのカトリック信者としての信仰が、わたしたちにもたらしたものです。そのことへの感謝のうちに、今日の福音をあらためて味わい、わたしたちのためにそのいのちを与えつくしてくださった、良い羊飼いであるイエスのみ後に着いて行く決意を新たにしたいと思います。

日々の耐え難いほどの労苦と悩みがわたしたちを打ちのめそうとする時、心を奮い立たせて、典礼聖歌 123 番にある詩編 23 の歌を歌うことが出来たらと思います。

主はわれらの牧者 わたしは乏しいことがない。
神はわたしを緑の牧場に伏させ、憩いの水辺に伴われる。
神はわたしを生き返らせ、慈しみによって正しい道に導かれる。
たとえ死の陰の谷を歩んでも、わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしとともにおられ、その鞭と杖はわたしを守る。

旧約の神の民がその苦難の歴史を通して歌いつないだ、このような神への信頼の歌をわたしたちも歌い続けたいと思います。そして、このわたしたちの苦難の中からの信頼の歌に答えて、わたしたちの牧者である主が、今日もわたしたちに呼びかけておられるおことばとして、今日の福音の最後のおことばを心に留めたいと思います。

「わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠のいのちを与える。彼らは決して滅びず、誰も彼らをわたしの手から奪うことは出来ない。わたしの父がわたしにくださったこれらの者たちは、全てのものより偉大であり（貴重であって）、誰も父の手から奪うことは出来ない。（これらの者たちへの愛において）わたしと父とは一体なのだ」。

今日の福音の最後に響いているこのおことばが、ここに集うわたしたちの心に深く染み通りますように。この福音を知った者たちとして、わたしたち一人ひとり、わたしたちの生活がわたしたちにとってどのようなものと思われようとも、そのわたしたちは、父なる神と父なる神のもとから遣わされた、わたしたちの主イエス・キリストにとって決して失われてならない、かけがいのないものであることを知った喜びに満たされますように。

イエス・キリストの十字架の死と復活を通して、わたしたちを「緑の牧場」、「憩いの水辺」に導く良い羊飼い、真の牧者としてご自分をお示しくださった神の愛を信じ、その信仰によって生きる恵みを願って、今日のミサを感謝のうちにおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高